

# 会 報

TUWVOB会 No. 48 2017. 12. 23

ホームページ <http://tuwvob.yamagomori.com/> (新しくなりました)

メールアドレスの変更は利根川さんに連絡して下さい: [s-tonegawa@ac.auone-net.jp](mailto:s-tonegawa@ac.auone-net.jp)

メールアドレスが不明な方へOB会報を郵送してきましたが、昨年原則としてTUWVOB会のホームページへの掲載のみとしました。郵送をご希望の方は、最後のページの事務局(8期 佐藤)までご連絡ください。

## 水上俊彦君 富士山遭難事故 搜索報告書

2017.07.08 TUWVOB 会

2017年5月11日(木)に、TUWVOB 水上俊彦君(8期)は富士宮口五合目から単独で富士山をめざしていた。下山予定日になっても帰宅しないことを心配した家族が、13日に横浜戸塚署に失踪届を提出。14日の朝になって五合目駐車場で水上君の車が確認されたことを受け、静岡県警富士宮署山岳遭難救助隊による空と地上からの搜索が開始されたが手掛かりは得られなかった。TUWVOB会がこの情報に接したのは、遭難から8日経過した5月19日の夜だった。

単独行動である上に目撃者の情報も見つからなかったことから、搜索に不可欠な彼の行動についていろいろな憶測を呼んだ。6月4日になって彼の最終行動軌跡がグーグルアプリ(timeline & myactivity)に残されていることが判明し、それが貴重な手掛かりとなって搜索エリアもある程度絞られた。

しかし警察の搜索は5月20日に打ち切りとなり、その後の搜索は民間団体の手に委ねられた。各団体の搜索活動が精力的に行われる中、6月24日 TUWVOB 搜索隊によって、表大沢(赤沢)上流の崖下灌木帯で発見されるに至った。遭難から実に44日目のことであった。

(搜索報告書の「まえがき」より)



搜索の詳細はホームページの搜索報告書を参照願います。

搜索ルートと遭難場所

## 水上くんを偲ぶ

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

「水上よ、お前はなんて馬鹿なことをしたんだ」 目の前に水上がいたらそう言ってやりたいな、と前田と話しながら富士山のお中道を歩いて行った。最初の搜索では、富士山のあまりのスケールの大きさに、絶望的になった。しかし、私は信じていた。ワングルで4年間鍛えた水上が、ただの砂礫帯や樹林帯で倒れるはずがない。倒れてたまるか。そう信じていたからこそ、崖のような最も危険なところを搜した。荒涼とした富士山には珍しく、ミヤマキンバイなどの高山植物に囲まれていたのがせめてもの救いであった。

人は、「無謀だ!」、「山を甘く見ていた!」と言うかもしれない。でも私には水上の気持ちが分かるような気がする。大学で本格的に山を始めてから50年余り、みんな古希を迎える年になってしまい、山を続けている者はほとんどいない。そんな中で今でも山を登り続け、古希を迎える年に百名山を踏破し、しかも故郷の山、富士山で始まり、富士山で締めたことを誇らしげに語っていた。とは言うものの、古希という言葉は、体力や気力の衰えを感じさせる響きがあり、そこを乗り越えたい、少なくとも気力では負けたくないという気持ちを起こさせたような気がする。

ワングルを卒業する時に相原が中心になって作ったアルバムを開いてみた。そこに水上は、自画像としてこんなことを書いていた。

- 誘惑に弱い男、遊び好きな男： 東から麻雀の誘いがあれば講義をさぼり、西から酒の酒の誘いがあれば金がなくてもつき合い・・・
- 温和で人のよい男： 一皮剥ぐと、自分に甘い男、もう一皮剥ぐと、他人にも甘い男、さらに一皮剥ぐと、結局弱い男、もっと強くなれ。
- いつも静かな笑みを浮かべた男、その本質は、他人との対決を笑顔でごまかし、自分の心のカラッポなことを笑顔で覆い隠し・・・・・・でも僕は笑顔という仮面しか持つことができない。

50年前の水上も、チリワインを持って我が家を訪れ、オギャーと乾杯していたついこの前も、変わらない水上だった。



夏合宿集中地にて(上)荒川三山 1970.5(下)

## 水上さんのこと

8期（昭和44年卒）佐藤 良子

家のベランダから西を見ると富士山が見えます。新雪に輝く富士や夕焼の中のシルエットなど、季節や時間の変化に応じて富士はいつも美しい。ダイヤモンド富士を見れた年もありました。

今年5月、突然水上さんの遭難を知りました。その日から富士山は水上さんが存在する山になってしまいました。

富士宮警察が捜索を打ち切った後、ワングルの有志が捜索に向かうことになりました。情報交換やミーティングを重ねて周到な準備をした後の6月24日でした。私もその日に合わせて友人と三浦半島のとある岬「黒鼻の岬」に行くことにしました。相模湾の向こうに富士山が手に取るように見える場所です。何と、私がまだ岬に辿り着かないうちに拓哉さんから電話が入りました。水上さんが発見されたのです。

水上さんは退職後、会社の仲間たちと三浦半島をよく歩いてました。その帰り、うちに寄ることが度々ありました。ザックには決まってチリワインのボトルと自分が読み終えた数冊の小説が入っていて、それらは皆うちに下されました。来ればいつも一緒にワインを飲み、いろんな話をしました。彼のバリトンの声が耳に心地よかったです。

水上さんはかなりの読書家だと聞きました。部屋は本だらけで、奥さんに苦言されるほどだと……。それで最近本を買わずに、家族中の図書カードを持って行って、図書館の本をたくさん借りてきて読んでいるのだとも言っていました。読むのが相当速かったんでしょうね。

好きなことにとことん集中する彼、今ごろ天上では何に夢中になっているんでしょう。あの穏やかな笑顔は今も変わらないのでしょうかね。



東京湾を背に@横須賀・馬堀海岸



いつもチリワインで乾杯 料理は拓哉さん

## 水上くんを偲んで

8期（昭和44年卒）前田 吉彦

現役の時、水上と一緒に山に登ったことは余りなかった。だけど理系が多いWVの中で「暇な経済」の声にもめげず、いつもニコニコ顔で話しの真ん中に座っていたのが印象的だった。その後30年も経て、9期の伊藤君夫妻が毎年企画してくれるOB山行では何回も一緒した。

そんな折100名山の1/3はWV現役の時、1/3は会社勤めの時、残りを退職後に登ったと話していた。最後の1/3はいずれも辺境の地、あるいは困難な山であっただろうと想像すると、数年の間に良く登ったものだと感心する。今回の富士登山も、翌週に本人が企画していた8期有志山行の場で絶好の土産話にすると積みだっただけに違いない。

驚愕の遭難の報に接して24時間もしない間に、予定していた8期有志山行を情報収集山行に切り替えた。その後小原先輩をはじめ8期9期のメンバーが、情報提供や情報精査あるいは現地捜索に加わり、捜索は本格化した。少ない情報、限られた時間、老いた捜索隊がほぼピンポイントで彼を発見できたのは、水上が途中で下山方向を誤ったことに気付いた後は、一貫して正規ルートに戻る努力を続けてくれたからである。結果は残念だけれど、水上は最後まで望みを捨てず、ワングルの教えを守ってくれていたのだ。

合掌。



TUWV 4年 クリスマス@二口小屋

### 水上さん(8期)を偲ぶ

8期(昭和44年卒) 三日月 道夫

突然「行方不明」の連絡を受けた時、何かすがる思いを抱いて車は自然に登山口に走っていました。裾野から仰ぐ富士山は残雪をいただき、日本一の山に相応しく圧巻でした。しかし五合目登山口に到着してみると、簡単に頂上に届きそうな不思議な感覚を覚えるのです。これが霊峰富士の魔力なのでしょう。その数日後に捜索のためお中道を辿って表大沢まで行きましたが、まさかそこからわずか300m下が遭難地点だったとは思ってもよらず、発見されたときには悔しさと共に愕然としました。

TUWV卒業後は同期会でお会いする程度でしたが、47号会報の記事で百名山完登を知り、お祝いを兼ねて久しぶりに誘うことにしました。昨年10月に伊藤さん(9期)と三人で南八ツ権現岳に登り、昔ながらの趣ある権現小屋で酒を酌み交わして一夜を過ごしたのが最後の山行になってしまいました。

卒業記念アルバムの中で、彼は「誘惑に弱い男、温和で人の好い男、いつも静かな微笑みを浮かべる男」と自己分析していました。人が良過ぎるほど善良でイヤと言う言葉を知らず、いじられても反論しながら結局許すような性格の彼は、8期のマスコットの存在でもありました。

水上さんにとって富士山は故郷静岡の山として、特に強い思いがあったのでしょうか。48年前のアルバムに残された愛用のピッケルが今回剣ヶ峰頂上で最後に撮った写真にあるものと同じであることを鑑みれば、富士山との永久の結びつきを感じます。ある意味ではうらやましい限りです。

これから、富士山を見ると必ず彼を思い出すことになります。安らかに！



朝日岳にて

2017.05.11



富士山頂で愛用の

ピッケル(遺品カメラより)

## 水上先輩を偲ぶ

9期（昭和45年卒）石野 好昭

水上さん、もういないのですね。会えないのが信じられないのですが、ぼやっとしている時に、水上さんのあの人なつかしい笑顔が浮かんできます。

ワングル時代は殆ど一緒したことはなかったのですが、社会人になって20数年後、ワングル後輩の舩山さんからの誘いで水上さんと一緒することになり、その後20数年、年数回の山行を楽しませて貰いました。

当初、週末に水上さんの車で丹沢の山懐（ユーシンが多かったですね）に入り、バーベキューをしてたっぷり飲んで語らい、翌日山登り。山上に泊まって翌日早い時間に帰宅する楽しい山行でした。又、今から約25年前に、ネパールに同行させて貰いました。

アンナプルナ周辺のジョムソン街道をトレッキングする途中で水上さんが高山病にかかり、ヘリでカトマンズまで降りました。水上さんは狭いヘリの機上では意識なく、私はカリガンダキの沢筋上空を、左右にダウラギリ、アンナプルナの大きな山容を眺めながら、早く病院へ、早く・・・！楽しめなかったのですが、今となっては懐かしい思い出です。

百名山登頂を達成したのに、早まりました。天国で山に登っていますか？ 安らかにお休み下さい。



同期山行 @ 女川 2016.9

## 同期会を終えて、2017年度7期同期会報告

7期（昭和43年卒）石川 誠之

昨年の同期会で今年の同期会は初めての東京開催と決まり、金子さん、山口さん、大釜さんとともに幹事を仰せつかり、半年ほどかけて準備を進めました。今回は隅田川の舟遊びのほか、江戸の文化や情緒に触れる浅草、深川・両国の散策のオプションを計画。東京を訪れることはあってもなかなかゆっくりと過ごすことはできなかった人も多いと思います。東京スカイツリーの眺望やお台場周辺の遊覧も含み、新しい東京の魅力にも感じてもらえればと考同期のみなさんに諮ったところ賛同いただき、実施の運びとなりました。10月 21日（土）～22日（日）の二日間、参加者は屋形船での同期会には18名、浅草散策

12名（どぜう昼食組が9名、浅草演芸ホール鑑賞組が3名）、深川散策10名（深川井・深川めし昼食ほか）となりました。闘病中の上田俊朗さんが奥様同伴で北海道から駆けつけてくれました。あいにくの台風が近づく空模様で雨にも見舞われるという状況でしたが、楽しんでいただき事故もなく終わりホッとしています。

隅田川の屋形船は、金子幹事の計らいで旧知の船宿「深川富士見」のお世話になり、貸切でしかも割引料金で乗船できることになりました。17:30に深川富士見橋から乗船。このころは雨も止み、

隅田川を下ってライトアップされたレインボーブリッジをくぐり、お台場を巡って上流へ、清洲橋、松尾芭蕉庵辺りまで遡上。2時間半、兩岸の美しい夜景を楽しみながらその場で揚げるてんぷらや新鮮なお刺身、江戸前の海の幸を使った盛りだくさんのお料理を楽しみました。同期会では、上田さんの挨拶のあと故水上俊彦君遭難死を悼み

黙とうし、献杯。菊谷さんから捜索・発見にいたる経過を説明いただきました。誠に残念です。誰からも愛された水上君のご冥福を祈ります。

初日オプションの浅草散策では、どぜう組は駒形どぜう浅草本店でどぜう料理を堪能したあと浅草観音参拝。このあと雨のため外回りを止め日本橋の日銀貨幣博物館を見学しました。2日目オプション散策も雨のため、計画を縮小し深川江戸資料館見学と深川釜匠での深川セットの食事（ぶっかけめしの深川丼、炊き込みご飯の深川めし）を味わいました。折をみて今回雨で割愛した見所もたずねてみたいものです。オプション散策は食の旅中心になりましたが、本当においしく江戸の伝統の庶民の味を楽しみました。

＊同期会を終えて

今回も多数の同期のみなさんが集まりました。それぞれいろいろあってもみんなと会うのを楽しみに目標にしてがんばれるのだと思います。行き届かぬこともあったと思いますが、同期のみなさんのご協力に感謝しています。来年は岩手開催の予定です。幹事さん中心に皆で盛り上げたい。



## 8, 9期合同山行 第18回 飯盛山・入笠山

8期（昭和44年卒）根岸 巖

最初の計画では合算に行く予定であったが、8期の水上俊彦さんが、5月に富士山で帰らぬ人となってしまったため、彼が皆で行こうと計画していた飯盛山と入笠山変更し、一緒に登っているという思いを持って9月3日、4日に山行を実施した。参加者は、

8期：相原夫妻、前田夫妻、三日月、宮下、根岸（7人）

9期：伊藤夫妻、富川夫妻、桃谷、原田、石野、藤中（9人）

9月3日、平沢峠飯盛山登山口に集合。宮下さん、藤中さんは遥々宮城県から駆けつけてくれた。天気は晴れで暑く、日陰を歩くとほっとする。山頂へ続く道平坦で風もあり、気持ちのいい行程であった。山頂では少し雲があったが、涼しい風に吹かれながらのんびりと周りの景色を楽しめた。きっと水上が気遣ってくれたのだと思う。

山を下りて、今日の宿、美味しい学校に向かう。周りは懐かしい田園風景であった。美味しい学校は、明治、大正、昭和の建物が併設された旧津金小学校の昭和校舎を改築した施設である。部屋は教室を仕切った間取りで広々としている。廊下からの眺めは、昔、学校から眺めた景色と同じである。夕食は食堂で食べた。

夕食後、一部屋に集まり、それぞれが持ち寄った水上に関わる資料や写真を回覧し、パソコンで表示して水上を偲んだ。

- 理系の多い部員の中で、暇な経済と言われても、決して怒らず、いつもにこにこしていて、ちゃんと勉強していると言っていた。
- 1年の中で、山の中で過ごした日数の多さを自慢していた。
- 写真撮影ではいつも真ん中にいる。

その後、警察や地元の山岳会の搜索で見つ



らなかつた後の5月28日に、8期5名がお中道を搜索した説明があった。お中道は殆ど道跡もなく、滑りやすく危ない道であるが、周りは富士山の斜面が広がる雄大な光景である。行けるところまで行き、最後に「水上！」と呼びかけたところ、反射する山もないのにすぐに木霊が返ってきた。みんなは水上が返したと信じている。

それから、水上の気持ちについて話をした。遺留品のカメラにあった山頂の話になり、登頂してやり遂げたという充実感に満ちた表情に、悔いのない満足した人生を送り、水上は旅立ったのだと、これが皆の思いであった。奥様からの手紙にも、好きな登山をして、多くの友人に送っていただき、人生に満足していることであろうと書いてあった。

9月4日は入笠山へ。ゴンドラの山麓駅まで車、そこからゴンドラに乗って山頂駅へ。ゴンドラの下はマウンテンバイクのコースになっている。そこから入笠湿原経由で山頂を目指した。湿原にはレンゲショウマ、リンドウ、マツムシソウ、ワレモコウ、桔梗などが咲いていて綺麗であった。

50分の苦しい登りの後の山頂は360°のパノラマで、疲れも飛んだ。下山後は、ゆーとろん水神の湯で疲れを取ってから解散した。良い山行だったと水上も言っていると思う。



## エベレストの思い出

3期（昭和39年卒）後藤 龍男

最近スカパーで「エベレスト」という劇場映画を見ました。2年前の2015年封切りで、1996年にエベレストで起きた死者16人の大量遭難事件を、ジョン・クラカワーが『空へ-エベレストの悲劇はなぜ起きたか』というドキュメンタリーに書き、それを映画化したものです。ベースキャンプより上の登攀シーンはさすがに実写映像が少なく、特に実際の遭難現場になった8000mのサウスコルから頂

上に至る登攀シーンは、ほとんどがCGとセット撮影の作り物映像でしたが、ルクラからエベレストBCに至るトレッキング行程は実際のロケ映像が使われていて、我々も見慣れた風景が次々に出てきて、とても懐かしい気分になりました。

このトレッキングルートは二度歩いています。最初に歩いたときサポートしてくれたラクパと言うシェルパが、英語も上手くとっても頼りになるシェルパだったので、二度目の時も彼に頼みました。僕は歩くのが皆より遅いので、いつもパーティの先頭を歩かされます。そのお陰で往復2週間の行程で、いつも僕の前を歩くラクパと道中いろいろな話が出来ました。



ラクパは数年前までエベレスト登頂をサポートする高度シェルパをやっていた、何度もエベレストの頂上に立っているそうです。最後の登頂の際凍傷にかかり、指を2本なくしています。ちょうど結婚して子供が出来たばかりで、奥さんに高収入でも危険な高度シェルパはやめてくれと泣いて頼まれ、今は僕らのようなトレッキング客相手のすこぶる安全な仕事をしているのだそうです。彼らシェルパにとって6000m以下は平地を歩くのと同じで、たまに仕事でカトマンズに下りると体調がおかしくなると言っていました。

ラクパの話では、サウスコルから上には、エベレスト登山が始まって以来の数多くの遭難死体がゴロゴロ散乱しているそうです。高所なので腐ることもなく、そのまま行き倒れているのだとか。彼も登攀中に青氷に埋まった遭難死体をうっかり踏んでしまったことがあるそうですが、青っちょい顔にざんばら髪が被さっていで気味が悪かったと言っていました。なぜ死体を下ろさず放っておくのか聞くと、下ろすにしても8000mまで上られるへりはない。人力で下ろすしかない。自分の身を守るのが精一杯の高所で、誰もそんなことはしない。下ろすといろいろもめ事が起きるので、誰も下ろせと言わないのだそうです。マロリーをはじめ、エベレスト登頂に成功した登山者のうち、4分の1は無事生きて下山できなかったそうですから、腐らずに残っている遭難死体は相当な数でしょう。



ラクパの住まいはナムチェバザールの高い場所にあります。飛行場のあるルクラから歩き始めると、最初の幕営地は標高3600mのナムチェです。いつもラクパの家のゾッキョ放牧場にテントを張りました。高所順応のため最初にここで必ず2泊しますから、行き帰り合計6泊したことになります。思い出深い、懐かしい場所です。

ご存じゾッキョはヤクと雌牛を掛け合わせた一代雑種で、大人しく力が強いのでエベレストトレッキングの際の荷運びに使わ

れます。エベレスト街道はたくさんのゾッキョが歩くので、ゾッキョの糞だらけです。テントの回りも糞だらけでした。ゾッキョの糞を気にしていたらエベレスト街道は歩けません。エベレスト街道以



外ではなぜかゾッキョは使われず、荷を運ぶのはすべて人力です。エベレストトレッキングではガイドのシェルパと料理人しか付きませんが、ほかのルートだと荷運びポーターを10人以上帯同するのが普通です。

カラパタールからの帰途、二度目のラクパ家訪問をしました。その前の年にガイドをしたイタリア人登山家の誘いを受け、イタリアへ出かけてホテルで働いていたのだそうです。ラクパの家のリビングルーム兼ベッドルームで食事をしているとき、カラパタール登頂祝いにとイタリア土産のワインをご馳走になりました。2年前に僕らのガイドをしたとき、ワインが好きだと僕が言ったのを憶えていたのだそうです。前の時はまだ小さかった上の娘さんはすっかり大き



くなっていて、カトマンズの小学校に寄宿していると言っていました。このトレッキングでは、メンバーの佐藤君がカラパタールで高山病にかかり歩けなくなり、ラクパが背負って標高4500mのペリチェにある診療所まで下ろし、そこからヘリでカトマンズに運び下ろしました。そういうわけで、先にカトマンズに無念の下山をした佐藤君は、ラクパの登頂祝いのイタリアワインは飲みそびれました。



仲間内で一番山に強い佐藤君ですが、往路カラパタールの手前、ディンボチェあたりから高山病症状が出始めていました。カラパタールの手前、標高5000mのロブチェでまったく歩けなくなりました。我々がカラパタールを往復した後、標高で500m下のペリチェに下り、そこからヘリで下ろすことにしたのですが、ペリチェに到着した日は、ちょうどカトマンズが年に一度のお祭りで、ただでさえ繋がり良くない衛星電話を何度かけてもカトマンズの事務所と連絡が取れません。やむなくラクパと相談して、

ポーターを数人雇って担いで下ろすことにしました。そのことを佐藤君に伝えると、何としてもヘリで下りたいと言います。相当参っている様子でした。

そうこうしているうちに、ラクパが辛抱強くかけ続けてくれた衛星電話がやっと繋がり、翌早朝のヘリの手配が出来ました。こういうことが可能だったのも、ラクパのような信頼の置けるシェルパを選んだお陰でしょう。その後佐藤君はカトマンズの病院で手当を受けましたが、かなり重度の肺水腫で、あのまま担いで下ろしていたら大事に至った可能性が大きかったそうです。佐藤君のヘリは標高4500mのペリチェからカトマンズまで僅か30分で下りたそうですが、残された我々はそこから歩いて4日かかりました。カトマンズ空港で再開したときは、佐藤君もすっかり元気になっていました。

映画「エベレスト」を見ていて、いろいろなことを思い出しました。もう一度エベレスト街道を歩きたいのはやまやまですが、この歳ではまず無理でしょう。歩けるときに行っておいて、つくづく良かったと思うことにしています。

## ミャンマー旅行記

5期（昭和41年卒）真山 晃一

昨年9月、50周年同期会を岳温泉で行ないました（藤田さんが昨年報告）。その時の夜、幹事部屋にはほぼ全員が集まり、酒を飲みながら大いに議論が盛り上がりました。その中で朝倉さんからミャンマーで沈下橋を作るのでぜひ見に来ないかと誘いがありました。また門屋さんからは、従弟がミャンマー大使をやっている一度遊びに来ないかと言われているとの話が飛び出しました。私もミャンマーはぜひ行ってみたい国でした。

・・・その後話は急転直下となり、12月8日～14日の7日間ミャンマーを訪問、朝倉さんの活躍ぶりを見てきたので報告します。

初日、門屋さんと私がミャンマーのヤンゴン空港到着、朝倉さんの出迎えを受け、その足で大使公邸に行きました。樋口大使は警視總監を務めた後にミャンマー大使になり、3年目で夫人ともども大歓迎してくれました。子供のころ門屋さんが10歳年上で面倒を見たという間柄がきいて、美味しい食事とお酒をごちそうになりながら、朝倉さんのミャンマーでの活動をはじめ、いろいろ楽しい話題を話すことができました。一か月ほど前にアウンサンスーチーさんが日本を訪問したばかりなので、その時の秘話も話してもらいました。

翌日は早速朝倉さんが作る沈下橋の建設現場に視察に行きました（車で3時間ほどの田舎）。2日前に起工式を行ったばかりで、半年後に完成の予定だそうです。付近に小学校があり、子供も利用します。前に作った木橋は一年で流されたそうです。私たちがいた時にも牛車、オートバイが川を渡っていきました。



ミャンマー大使館にて



沈下橋の建設現場 私の持っているのが完成予定図



建設現場の川を渡るオートバイ。乾期は渡れます

3日目からは観光です。以下訪れた主な観光場所を写真で説明します。朝倉さんがいろいろ案内してくれて本当に楽しい旅行になりました。大感謝です。



ザガインにあるカウナムドー・パゴダ  
(朝倉さんはおっぱいパゴダと呼んでいます)



古都マンダレーにあるクトードー・パゴダで



マンダレー駅前のお土産店で両手に花の門屋さん。



ミャンマーが独力で作った全長3.5Kmのパコック橋



夕陽を鑑賞したバガンの名所シュエサンドー・パゴダ ヤンゴンで最大の寺院、シェダゴン・パゴダ

朝倉さんの作った沈下橋は5月12日に完成し、今日まで付近の小学校の子供たちをはじめ、現地の人々に愛用され、大いに役立っているそうです。この橋はYoma橋と呼ばれています。今年もさらに3つの沈下橋をミャンマーに作る予定になっています。さらにその後の計画として、ラオスなどにも水平展開を考えているそうです。今後の活躍を大いに期待しましょう。



## ミャンマーに架けた沈下橋

5期（昭和41年卒）朝倉 肇



概成したYoma橋（4月27日）



開通式を迎えたYoma橋（5月12日）



現地代表、来賓、日本大使館書記官、JIP代表らのテープカット



現地における技術指導



濁流にもかかわらず橋いっぱい並んで渡る学童



女性たちも普通の服装で歩いている

Yoma橋の開通後、雨期に入って川が増水する日が増えた。これまでは歩いて渡れず、学校も休みになった。橋ができたため、増水しても往来できるようになり、現地の人達に喜ばれている。最後の2枚の写真は、彼らが撮影して送ってくれたものである。その後、橋面を越流する洪水もあったが、橋の損傷はなかったと伝えてきてくれた。

## 朝日そして飯豊

5期（昭和41年卒）八木 眞介

約20年前に本格的に山歩きを再開して以来、TUWVの現役時代に最も思い出に残る山、飯豊連峰と朝日連峰をまた歩きたいとずっと思っていた。ただ、両方とも避難小屋泊まりとなることと、公共交通機関を使って登山口まで行くのは難しいと考えて、あこがれのままで過ごしてきた。しかし、70才を越え、なんとしても行きたいという思いが強くなった。登山口へ行く方法をネットで調べたところ、何とか行けることが分かり、厳しい山歩きになることを覚悟で行ってみることにした。

昨年の夏、朝日に出かけた。左沢から朝日鉱泉への乗合バスを利用して朝日鉱泉に泊まり、朝日鉱泉から鳥原山・小朝日岳経由で大朝日小屋に一泊、2日目は稜線を行ける所まで往復して大朝日小屋に二泊目、3日目に中ツル尾根を下って朝日鉱泉へ、さらに自宅までという計画を立てた。しかし実際には、1日目は鳥原山までに予想以上に体力を消耗してしまい、鳥原小屋止まりとなってしまった。2日目に大朝日小屋まで登り、少しでも稜線歩きをと思い、西朝日岳まで往復した。3日目の中ツル尾根も沢に下りた後が予想以上に大変だった。

竜門山までは行きたかったが、それが叶わず、また8月に入っていたためか、花の数が少なかったのが残念だった。しかし、朝日連峰の片鱗を楽しむことができ、特に大朝日岳から見た以東岳までの稜線のながめはすばらしかった。

今年の夏は飯豊に出かけた。飯豊は、磐越西線の山都駅から川入集落までバスがあり、切合小屋では食事を出してもらえる。川入へのバスに東京からでは間に合わないので、山都駅からタクシーで川入に入って民宿に泊まり、民宿の車で登山口まで送ってもらい、三国岳経由で切合小屋まで行き一泊、2日目は飯豊本山経由で御西岳からさらに主稜線を行ける所まで往復して切合小屋に二泊目、3日目は往路と同じルートを下り、さらに自宅までという計画を立てた。1日目の登りでは地蔵山との鞍部から三国岳への登りが岩稜のきつい登りで体力を消耗し、その後の稜線の登り下りが辛かった。2日目の御西岳までの往復は比較的楽だったが、御西岳からの主稜線は一日中ガスの中で、その先に行くのをあきらめた。3日目の下りは川入まで歩くため登りより距離が長く、結構厳しい。

切合小屋から先の飯豊本山を中心とした稜線は思っていた通りのゆったりとした稜線で気持ちの良い稜線歩きを楽しんだ。しかし、主稜線がずっとガスの中だったため、お花畑咲く主稜線の写真を撮るという目的は叶わなかった。

両方もう一度行きたいという思いが強いが、年ごとに体力が落ちているので、厳しそう。



大朝日岳から北を望む



飯豊の稜線

## 赤城山登山(同期会にお相伴して)

6期(昭和42年卒)加藤 邦明

今回は青木祐二さんが幹事で「尾瀬にて同期会」の計画日程に乗った。

事前に準備した「登山計画書」を持って、2017年7月鎌倉の自宅を自家用車で5時に出発した。国道1号線ー藤沢ICー(圏央道)ー鶴ヶ島JCー(関越道)ー高坂SA(朝食)ー駒寄スマートICー国道17号線ー上武道路経由ー赤城山大洞の「おのこ駐車場」には8時23分に到着した(晴れ)。

バロメーターを駐車場の標高1,345mに合わせて、準備体操後、8時45分に出発した。赤城神社9:00ー黒檜山登山口9:08ー一休(標高1,575m:足元は長石斑晶を含む灰白色の安山岩で、周りには軽石の小粒転石が多い)ー一休(標識4:1,690m)ー尾根筋に10:40に到着ー黒檜山山頂には10:45着。登山口からほぼ標準時間通りの1時間37分であった。

黒檜山の山頂にてご案内の「絶景ポイント」へ行くが、ガスで周りの山々は見えない。山頂に戻り11:03一分岐を過ぎたら直ぐに「黒檜大神」が祀ってあったー「花見ヶ原森林公園」への分岐ー白色や黄色や赤い花咲くコルー大ダルミー駒ヶ岳11:53(曇り:標準時間と同じ50分)。

駒ヶ岳を12:03に出発ー鉄製階段が出現して下るのは大変楽ちんー自動車道路には12:48に下った(曇り/標準時間とほぼ同じ45分)ー車には12時53分に戻った。4時間弱の登山で、約20名の同好者に会ったのは、そこそこの人気山なのであろう。

途中、老神温泉で「大蛇みこし」を見学して、集合場所の戸倉温泉戸倉旅館に到着した。



赤城山(黒檜山)



黒檜大神



至仏山荘

## 妙義山の紅葉を故水上俊彦君に捧げる

8期(昭和44年卒)相原 敬

日本の紅葉は色彩豊かで世界一美しいと言われる。その紅葉舞台は多種多様で、京都の寺社に代表される建築物と調和する紅葉、ひなびた山村の風情ある紅葉、渓谷を走る車窓に流れる紅葉など数え上げればキリがない。山を愛する者としては山中で出逢う紅葉風景に心惹かれ、まさにその美しさは秀逸である。

群馬県には「上毛かるた」なるものがあるが小学生の頃から馴染みしてきた。山を題材にしたものも多く、特に「もみじに映える妙義山」の図柄が綺麗で好きだった。北ア等の高山や谷川岳、安達太良や栗駒で眺める灌木帯の紅葉も見応えがあるが、妙義山ではモミジを中心とした情熱的な紅が頭上に広がっている。

山に登る人たちは四季のうつろいに敏感で、とりわけ群馬では春のアカヤシオ、秋の紅葉、冬の霧氷を追いかけてあちこち県内を駆け巡るのが常である。妙義の紅葉時期は他の山岳地よりも遅い11月中下旬

らいなので、山岳紅葉の見納めとして県外から訪れる人も多い。表妙義の岩壁と織りなす紅葉に魅せられ、裏妙義の雪混じりの紅葉も晩秋と初冬がないまぜになって見る人の心に沁みるものがある。この美しき世界を切り取って、富士山で非業の最期を遂げた水上君に捧げ追悼したいと思う。

OB会の皆さまにも是非一度妙義の紅葉を味わっていただきたい。妙義は峻険な山ではあるが、高齢者向きのハイキングコースは少し体力に自信をなくした方でも容易に歩けるのありがたい。数年前のクライミングの帰りに拓哉と共に感動した思い出も記憶に新しく、今年はずい先日13期の岡部さんご夫妻と偶然一緒になり、初対面ながらモミジの下で親しく昔話に興じたのであった。



### 北アの大洞穴ハングを登る

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

北アルプスの唐沢岳幕岩（唐幕）にある大洞穴ハングは、黒部の丸山東壁の大ハングとともに、日本を代表する大ハングである。今ではほとんど訪れるクライマーのいない大岩壁の基部に、圧倒的な迫力でと大をあけている。

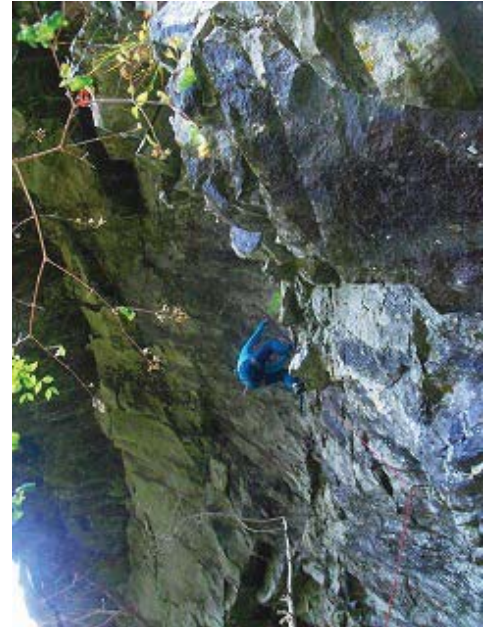
今年の秋は週末の度に台風が日本列島を襲い、雨の週末が続いた。10月初めの連休にクライミング仲間4人で唐幕を訪れた時も、雨の中、「大町の宿」と呼ばれている大きな岩小屋まで沢を詰めること



になった。天気予報より天気の回復が遅く、夜半まで雨が降り続いたため、翌日は快晴になったものの、岩壁はびしょ濡れで登れる状態ではなかった。急遽、予定を変えて大洞穴ハングを人工登攀することにした。

大洞穴ハングには何本か登攀ルートがあるとはいえ、アプローチには踏み跡がまったくなく、急な斜面のブッシュ帯を、岩角や木を掴みながら 1 時間半ほど登らなければならない。岩壁の基部はスラブ帯となっており、近づくだけでもⅢ級程度のクライミングが強いられる。大洞穴を下から見上げると、まるでモスクの天井を見上げているような感じである。垂直の壁(90°)で始まり、登るにつれてドーム状に傾斜が変わり、完璧なルーフ(180°)となった後に先端ではやや垂れ下がっている(約20°)。

この圧倒的な大ハングに、まずは鈴鹿から来た女性クライマーがリードで挑んだ。垂直の壁は、ハーケンに掛けたアブミ(縄梯子のようなもの)に乗って足を巻き込んで身体を上げ、次のハーケンに向かう。単調なアブミの架け替えも、前傾壁になるにつれて難しくなってくる。傾斜が増してルーフに近くなると、ぶら下がったアブミに乗りながら架け替えて少しずつ前に進むことになる。足の下には谷底まで落ちていく数百メートルの空間があるだけであり、物凄い高度感に緊張が走る。最初の女性クライマーが半分ほど登ったところでいったん降り、



次のクライマーに交代して更に前進した。交代しながら前進し、ようやく大洞穴ハングの先端に到達した。時間がかかったが、交代でリードで先端まで登ることができた。

本来はここは幕岩の大岩壁の正面をまっすぐ登る「京都ルート」の1ピッチ目である。今回は人工登攀が初めての人もいたのでハングの人工登攀の練習だけにしたが、そのうち完登を目指して挑戦してみたいものである。続くピッチも垂直の壁とハングの連続であり、壁の途中でビバークすることも多いルートであり、古希を過ぎた身には厳しいルートである。



大洞穴ハングの中央を人工登攀・・・高度感が凄い！

## 現役ヘロープワーク講習～作並の鎌倉山

8期(昭和44年卒) 佐藤 拓哉

作並駅の手前にお椀を伏せたような小さな山が鎌倉山である。意外にもここに格好の岩壁がある。50周年記念行事で仙台に行った時にも登ったので、今回は2度目のクライミングである。

6月17日の土曜日の朝、6名の現役(3年1名、2年3名、1年2名)と作並駅で落ち合い、鎌

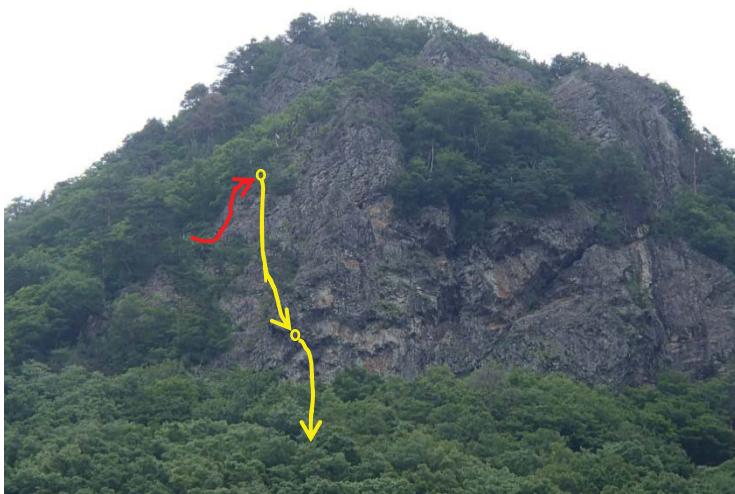


倉山の岩場に向かった。ここ10年以上にわたって部員数が少なく、部の存続そのものが危ぶまれているが、数少ない部員のモチベーションは高いものがある。昔はワングルと言えども「藪漕ぎ」のイメージであったが、最近は沢登りに力を入れているとのことであった。ロープなどの登攀用具は揃っているものの、部員数が少ないこともあって、それらを使いこなす技術が伝承されていないという悩みがあることを知った。見よう見まねで中途半端にロープを使うのは危険なので、二日間にわたってロープワーク講習を行うことにした。

初めての人もおり、初日は道具の説明（エイトカンよりATC、アルパインヌンチャク、環付きカラビナの数など）から始め、ロープの結び方（エイト、マスト、半マスト、マッシャー、ミュールなど）、支点の作り方と使い方、ランニングビレイの取り方、リードのビレイ、セカンドのビレイ、ローダウンなど基本的なことを教え、小さな壁で懸垂下降の要領を教えた。

二日目は、セキューリティー付き懸垂下降、懸垂下降時の仮固定、登り返し、チロリアンブリッジ、トラバース時の自己確保など、必要最小限のセルフレスキュー技術を教えてから、岩壁の懸垂下降を経験させた（1ピッチ目 45m、2ピッチ目 20m）。一人で全員をコントロールすることは簡単ではなかったが、無事講習を終えることができ、現役のみなさんも技術を吸収しようと熱心に受講してくれたことが嬉しかった。

講習で得た技術を使って沢登りを行っているとの報告とともに、来年は2回講習会を開いて欲しいというメールが届いた。嬉しい限りである。



## 故 富川正夫君を偲ぶ

9期（昭和45年卒）伊藤 健一

富川正夫君が11月29日に亡くなりました。9月3、4日の8・9期OB山行に来てくれて、3ヶ月も経たないうちに。富川君は、このOB山行にほぼ皆勤だったのです。

思えば1998年、8期卒業30年記念の安達太良山行に歩荷要員として9期も招かれたのが、合同山行の原点：“安達太良山へは、富川君の車に同乗して二人で行きました。その前日1998年9月18日の夜、二人して宇都宮駅前の飲み屋を梯子しました。何を語り何を聴いたか思い出す術もありませんが、今となっては懐かしい（8期相原さん）”。1999年は9期卒業30周年として平ヶ岳：“2回目の同期山行で平ヶ岳に行った時、下山で足を捻って(?)よれよれになって下山した姿を覚えています。”（8期佐藤さん）”。2000年奥鬼怒、2001年吾妻、2002年那須：“第5回の三斗小屋のときは、二日目に、三本槍から大倉尾根（北温泉）を下る本隊と別れて、車組の4人（拓哉、ケンちゃん、富川君と）が車回収へ。朝日岳を越えて峰の茶屋に下りましたが、現役さながらのハイペースで富川君をいじめたっけ。OB山行としてはロングコースだったので、大倉尾根を下った本隊も北温泉に着いたときにはヨレヨレだったね。懐かしいです。（8期相原さん）。”この年から奥様英子さんご一緒の夫婦参加となり、2004年西吾妻にも。奥様手作りの鶏のから揚げが名物になってきました。

たった一度、欠席したのが2005年尾瀬で、以降、皆勤。2006年吾妻、2007年二口（この年のOB会報を富川君執筆）、2008年青根・蔵王、2009年桑沼、2010年吾妻。2011年は東日本大震災のため中止：当時の藤中サポート基金に対し、“このたび会社より、東大日本災害復興支援のための特別手当10万円が支給されました。この主旨に基づき、本日富川英子名義で藤中サポート基金に20口送付しましたので宜しく願います。2011.12.13 富川正夫メール”。2012年桑沼、2013年吾妻、2014年裏磐梯：“五色沼巡りに出掛けた皆を見送り、毘沙門沼で富川君と一緒に留守番しました。そのときは、ゆっくり彼の話を聞くことができた貴重な時間でした（8期相原さん）”。この頃から抗がん剤の副作用がひどそうで、登山道入り口等で待てることが増えてきました。それでもOB山行には参加を続け、2013年女川、2014年安達太良：この時には、安達太良山頂まで自力で登ったのです。そして2015年蔵王、2016年二度目の女川を経て、本年9月、水上さん追悼の飯盛山・平沢峠・入笠山に参加：“そして先日、水上君の追悼登山でお会いしたのが最期になるとは。そのときは辛そうだったので、あまり話す時間がなかった。奥様を含め長いお付き合いでした（8期相原さん）”。2、3歩歩いては息を整える様子でした。永年の仲間にお別れに来てくれたたのかもしれないと、今になって思うばかりです。

学生時代、特にワンゲルに入った当初、富川君も私も弱くてトレーニングはとてもきつかった。亀岡の坂を登るときのビッケのグループの常連でした。それでもなんとかワンゲル生活を楽しめたのは、地道な努力の賜物です。

ハイライトの夏合宿データは以下の通り（“報告”による）。

1969年：越後駒一平ヶ岳、村山パーティ、SL：原、（2年）

鳥山、三原、（1年）富川、片野、石野、川田

1970年：鳳凰三山一甲斐駒・仙丈一白峰三山

佐藤パーティ、SL：守護、（2年）高田、富川、（1年）薄木、佐藤峰雄



亀岡の坂を登る富川君（右から二人目）。その左、故北条さん、桃谷君。

1971年：田代・帝釈一会津駒一燧ヶ岳一平ヶ岳

川田パーティ、SL:富川、(2年)菅原、若佐、小林、本田、(1年)7名

”富川君は私のパーティでエッセン係を担当していました。部全体のエッセン係を担当していたようで、夏合宿のフランスパンの焼き方、長期山行中のたんぱく質の供給方法として大豆の中華煮の調理方法を紹介していました(8期佐藤さん)”。

9期卒業生で初めて亡くなった富川君。寂しいです。ご冥福をお祈りします。

### 富川正夫君を偲ぶ

9期(昭和45年卒)石野 好昭

富川君、早かったね。ちょっと急ぎすぎですよ。いつの間にか古希を過ぎてしまいましたが、まだこれからというのに残念です。

1年の上越夏合宿で村山パーティと一緒に、中ノ岐沢から平ヶ岳を目指しました。今はマイクロバスですんなり通った場所ですが、当時は冷たい雨の中ひどい藪。富川君は大きな鍋をキスリングに括り付け、藪と格闘していたのを思い出します。途中退却しましたが、懐かしい思い出です。

新年会、OB山行等、病をおして参加。頭が下がります。

安らかにお休み下さい。

### 秩父山系百名山の登山

10期(昭和46年卒)田中 康則

今年はNHKスペシャ「逆転人生」で、大田区の会社員多田純一さん(30歳)が遭難14日目で救出された山に興味を持ち、秩父山系の山々を登山しました。最初は両神山です。多田さんは下山で七滝沢コースを選びました。鎖場も危険で、道迷いと滑落の多い難コースです。多田さんは沢に滑落して、ほぼ水だけを飲んで救出されました。

5月27日(土)麓の両神山荘に宿泊。28日(日)6時に登山を開始。一般コースで頂上へ。体調が良かったので下山は七滝沢コースを選び、ピンクテープを目印に何とか下山できました。



両神山頂上にて



下山は七滝沢コース

次は甲武信岳です。7月15日(土)白木屋旅館に宿泊。16日(日)毛木平まで車で送ってもらい登山開始です。千曲川源流道を沢沿いに登り頂上へ。下山は三宝山などを経て十文字小屋へ。直前は鎖場の連続で厳しいコースでした。翌日17日(月)はゆっくり下山。小淵沢からあずさの自由席にも座れ、秩父山系登山の充実感に浸れました。

久しぶりの登山もまた楽しいものでした。



甲武信岳頂上にて



2泊目の宿十文字小屋

## 2017年の春休み ー仙台に行ってきましたー

11期(昭和47年卒)鈴木 元昭

6歳の孫との約束、「仙台に行こうね」。3月の春休みに実現させました。

JR東日本の新幹線が大好きな彼は、ジイ(ワタクシのことです)と、昨年から新幹線に乗るショートトリップを行っていました。それは、「東京⇄大宮」の新幹線の旅で、E5系、E6系、E7系に乗りましたが、東京⇄大宮では速度が出ません。彼に「新幹線は遅いんだね」と言われていました。

今回の「仙台の旅」は、「新幹線は遅いんだね」を払拭することを目的としたものでした。「E6系こまち」の320km/hを体験させたいというのが主目的。それに加えてジイが秋田の実家に行ったときに、よく乗っていた「E3系」の車両に乗せてあげたいというのが2番目の目的でした。「E3系」の車両は、現在、山形新幹線の「つばさ」に使用されています。

行きの「E6系こまち」320km/h(右側の写真)を体験し、帰りに宇都宮で乗り換えて「E3系つばさ」に乗ることができました。二人とも大満足でした。

仙台で2時間、時間を作りました。東北大学の青葉山キャンパスに行きました。ここは遠い昔に4年間学んだところですが、大きく変貌を遂げていました。まず、地下鉄が出来ていました。青葉山駅というのが出来、エスカレータを何回も乗り継いでいくと、山の上の青葉山キャンパスにでました。学生時代、毎日バイクで登っていた山の上に出るとは、びっくりでした。

建物がほとんど新しくなっていました。東日本大震災の時の揺れで古い建物が壊れ、建て替えられました。自分が大学時代を過ごした金属系の建物も講堂を残して全部新しくなっていました。

風景が変わってはいいましたが、孫にジイの「学び舎」を見せることが出来、幸せでした。ふたりにとって、大きなエポックになったと思いました。



東北大学・青葉山キャンパス



「E6系こまち」 320km/h

## ロボット手術

22期（昭和58年卒）金子 精司

昨年人間ドックでPSAという数値が閾値より高いと言われ、年初に検査入院したところ、前立腺癌との診断結果でした。いくつか治療法があり、どの治療法を選ぶか悩んだのですが、手術することを選択し、6月に西新宿の東京医大で、最近普及してきたロボット手術で執刀していただきました。術後は比較的良好なようで、7月より職場復帰していますが、山登りは今シーズンいっぱいオフにしています。自覚症状が全くなく、人間ドックがきっかけで早期発見できました。PSAは血液検査で簡単にわかりますので、TUWV OB各位も、毎年の検診は欠かさず、ご自愛ください。

## リヒテンシュタインの旅

22期（昭和58年卒）利根川 敏

ヨーロッパにあるリヒテンシュタイン公国を訪問しましたので報告します。リヒテンシュタイン公国は非常に小さい国で（日本の小豆島くらい）有名な観光名所もありません。一方で、スイスとオーストリアに挟まれた山が多い国のため、1度訪問したいと思っていました。

旅の行程は、スイスのチューリッヒから電車（スイス連邦鉄道：SBB）に2時間ほど乗車、国境の町ザルガンズ（Sargans）に行き、駅前にあるバスに乗ると小さな川（国境）を渡りリヒテンシュタイン公国に入ります。首都ヴァドゥーツ（Vaduz）までのバス所要時間も30分ほどですので、チューリッヒから余裕で日帰り旅行になります。

この地域の鉄道やバスは時間が非常に正確で、しかもスイス国内の電車と2つの国をまたがるバスが1枚のキップになっています。リヒテンシュタイン公国ではスイスフランが使われており、現地を訪問した印象では、「この国は本当に独立国なの？ スイスの一部かな？」といった感じです。

山が多い国のため空気が大変きれいです。訪問した時期は8月でしたので雪山ではありません。現地の方の話では地球温暖化の影響もあり、雪の多い2月でもバスが止まることはなく、スキーシーズンの冬の方が雪山を含め美しい景色が期待できるとのことでした。



ファドゥーツ (Vaduz) 市内

## 鷹取山から二子山西岳中央稜まで

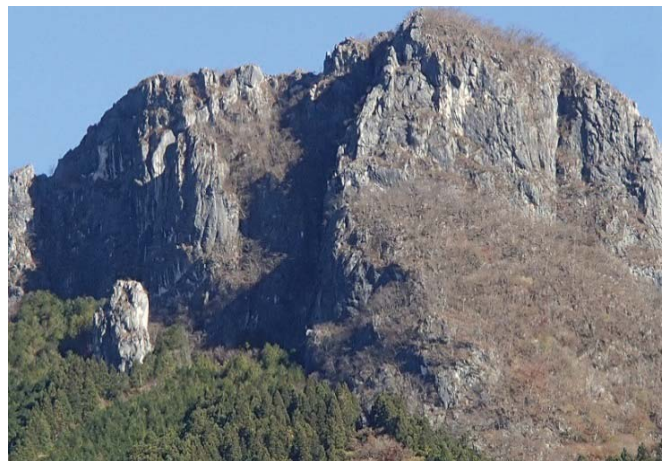
33期 (平成6年卒) 星 征雅

東京の大学では山岳部OBが監督やコーチという形で現役に関わり続けているが、私の現役時代にはOBとの接点は皆無に等しかった。いつの頃からか新橋亭での新年会の案内を送っていただくようになったが、自分には関係ない世界という気持ちで過ごしてきた。前回、「平成卒は会費半額」という案内をいただき、自分の育った部のルーツを知ってみたいという気持ちになり、卒業23年目にして初めてOBの集まりに出席した。その新年会の場で8期の佐藤さんと知り合い、毎週クライミングに行っているお話に刺激を受けた。また、宴席の締めで円陣を組んで部歌を歌った時、その歌い方が自分の現役の時と全く同じであることを体験し、同じ伝統の中で育った人がこんなにたくさんいたんだ、ということに感銘を受けた。

横須賀在住の佐藤さんと、逗子の私の家の中間にクライミングのゲレンデとして有名な鷹取山がある。佐藤さんにお誘いいただき、初めて鷹取山でクライミングをした。高さのある南面フランケや、基礎的なムーブを学べる電光クラックを楽しんだ。

佐藤さんは勤務先の若者をクライミングの世界に引き込んでいたが、その他に岩場で知り合ってレクチャーした人を仲間に加えて、佐藤さんを中心とした集団が出来上がっていた。私もそのメンバーに加えていただき、鷹取山に始まって、小川山、城ヶ崎、城山と連れて行っていただいた。

11月12日(日)、二子山西岳中央稜を企画いただいた。メンバーは4人。リーダーの佐藤さんと、佐藤さんの会社の若いクライマー具志堅さん、私の岩稜歩きのパートナーの竹内さん、そして私の4人だ。早朝、東戸塚駅で待ち合わせ、佐藤さんの車で奥秩父へ。天気は快晴。登る岩場が見えてくると気持ちが盛り上がる。9時過ぎに車道に車を停めて、装備を身に付けて歩き出す。程なく取り付きに着いたが、待っているパーティが予想以上に多かった。近くの岩場で時間つぶしをし、結局、取り付いたのは11時。2時間近い待ち時間であった。切り立った石灰岩の岩場は、手も足も置きやすく、それほど苦勞なく登れる。1パ



一パーティ目は具志堅さんがリードで佐藤さんがアドバイスしながら続く。2パーティ目は竹内さんがリードで私が回収しながら登る。順調に1ピッチ目を終えたが、テラスには先行していた数パーティが滞留していた。セルフビレイを取って他パーティと会話して過ごす。ここでの待ち時間も1時間くらい。全部で6～7ピッチあるので、山頂までは相当時間がかかりそうである。2ピッチ目、具志堅／佐藤パーティは難しい直登ルートを行った。具志堅さんは、外岩は初リードだが、ジムでは5.13を登るという上級クライマーだ。登り方が洗練されていて、見る人には難しさを感じさせないまま、するすると登って行った。竹内／星パーティは左の一般ルートに行く。竹内さんとはここ数年、北鎌・北穂東稜・前穂北尾根・明神南西稜など岩稜を一緒に歩いてきた。少し前から佐藤さんの集まりに加わり、急速に腕を磨いている。上の大テラスまで2ピッチ。クラック沿いに、一番難しい所で5.9か5.10aくらい。



高度感はあったが、私のような万年初級クライマーにも無理なく登れるルートであった。大テラスでパーティの順番を入れ替え、先に上がる。先行パーティの落石が当たった。混んでいる直登の壁で真下にいるのは危ないな、と再認識。残り3ピッチで岩場を抜けた。二子山の山頂に人がいるのが見えた。ちょうど太陽が向こうの稜線に沈むところだった。我々は山頂へは寄らず、このまま登ってきたところを懸垂下降で下ることにした。ヘッドンを準備し、後続の2パーティとすれ違いながら懸垂下降を始める。つないだロープを二組使い、セッティングと回収を効率的に行った。最後は暗闇の中の空中懸垂もあり、なかなか面白かった。

久しぶりだったが、やはり外岩のマルチピッチは楽しい。このような機会を与えてくれた佐藤さんに感謝。佐藤さんは周囲の社会人だけではなく、部員数が減って技術の継承が難しくなったTUWV現役のために、仙台まで赴いて指導をされている。時間も費用もかかることで、なかなかできることではない。個人ではなく、OB会とし現役を盛り上げていくことができればと思う。クライミングを続けている方は体で、続けていない方は費用面で支援いただき、東京にある大学と同じように、現役とOBがつながっている実力と魅力ある部に盛り上げていければと、この場を借りて提案する。

#### 訃報

平成 29年 5月 11日、8期の水上俊彦さんがご逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

#### 訃報

平成 29年 11月 29日、9期の富川正夫さんがご逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 新年会（新橋亭40周年）のお知らせ

2018年1月26日(金)18:00(会費は8,000円の予定) 毎年1月の最終金曜日

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。  
お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: [taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp](mailto:taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp)

### <2017年新年会出席者>

うっかり出席者を記録した名簿を廃棄してしまいました。出席者は40名で、そのうち平成の卒業者は33期の星さん1名でした。

2018年は、新橋亭40周年の記念の新年会です。ぜひご参加下さい。

40年の歴史の中には、週休二日制が普及したためか、40名で予約した土曜日の新年会に、12名しか集まらなかった年がありました(当時は本館)。それでもキャンセル料を取らなかった新橋亭……そんなこともありました。

### TUWVOB会 2016年会計報告(東京口座)

1. 収入	
前回から繰越	344,702
利息	32
計	344,734
2. 支出	
次回繰越	344,734
計	344,734

新年会において、「若い人の参加を促すために会費をタダにしろ、あるいは半額にしろ」という意見が出されました。昔、会費を集めていた頃、大半は新年会に参加した方から徴収していました。このような背景を考慮の上、次回の新年会から、平成に卒業した方に対しては半額をOB会の会費から補助することにします。ご理解のほどお願いします。



### ★★事務局より★★

- ◇ OB会報48号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を続けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワングルの飯を食った仲間であることには変わりはありません。
- ◇ メールアドレスが変更になった方は1ページ目の頭のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ この会報は原則としてOB会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行っていません。郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉

239-0801 横須賀市馬堀海岸2-23-14

Tel 046-841-8622